

第48回高知女子大学看護学会 ワークショップ

ワークショップ1：

看護におけるイノベーション —AIを活用した看護記録—

【コーディネーター】

原田 千枝（高知大学医学部附属病院 副看護部長 39期生 修士9期生）

木下 真里（高知県立大学 看護学部 教授）

【企画の意図】

看護におけるイノベティブな取り組みとして、聖マリアンナ医科大学病院での医療向けクラウド型音声入力サービス（以下、音声入力サービス）導入を取り上げ、導入の経緯や活用の実際、その効果についてご紹介いただきました。

【話題提供者の紹介及び話題提供の内容の概要】

藤野 智子（聖マリアンナ医科大学病院 急性・重症患者看護専門看護師）

まず内閣府が提唱しているSociety5.0の動画を視聴し、AIを活用した「少し先の未来像」について、紹介がありました。次に、実際の取り組みについて情報提供をいただきました。所属されているGHCU有する病棟では、GHCU稼働率100%以上が目標とされ、目標達成に向けて、業務改善に取り組む必要がありました。同時期、ご所属の病院ではNHP（Nurse Happy Project）を立ち上げ、外部業者サポートによるデータ収集・分析等が実施されることとなりました。NHPによるデータ収集・分析から、業務改善のための実施施策と目標を設定し、その中の一つに記録の削減があげられました。データ収集・分析から記録が時間外になっていることが明らかとなり、音声入力サービスは取り組みの一つとして導入されました。

音声入力サービスについては、実際の動画を用いて紹介がされました。このサービスはデバイスに音声を吹き込むと文字がそのまま表示され、看護職員は内容を確認後、電子カルテに看護記録として入力することが可能となるものです。専門的な用語もほぼ誤りなく表現され、音

声入力文字数をタイピングに換算した場合、150分/月に相当し、時間削減につながります。音声入力サービス導入や多くの取り組みをした結果、多忙な業務の効率改善、直接的患者ケアの割合増加、超過勤務削減など多くの成果が得られました。音声入力サービスにおいては、デバイスの使用率が上がらないなど課題もあり、スタッフを巻き込みながら継続的に働きかけることで、使用率向上、記録時間の削減につながった経緯についてもご紹介いただきました。

【ディスカッション内容】

情報提供後、質疑応答を行い、音声入力サービスの具体的なしくみ、デバイスの選択、記録の質の変化、音声入力とプライバシーの保護、音声入力のベッドサイド教育への効果、また業務改善をどう取り組むかなど多くの観点からの質問があり、回答とともにディスカッションを行いました。音声入力サービス導入、取り組みに向けた課題解決など、質疑応答を通して理解がさらに深まり、参加者の皆様がおかれた場所、立場での「看護におけるイノベーション」を考える機会になりました。

ワークショップ2：

関係性が脆弱な家族への関わりを通して考えるケアのイノベーション

【コーディネーター】

池添 志乃（高知県立大学 34期生）

【企画の意図】

COVID-19の流行など、現在の予測困難で複雑化する社会情勢の中で、家族の抱える健康問題も多様化、複雑化している。そうした状況のなか、家族を支援していくうえで看護職者は、それぞれの専門分野におけるケアのイノベーションが求められている。関係性が脆弱な家族への関わりを通してケアのイノベーションについて考える機会とする。

【話題提供者の紹介及び話題提供の内容の概要】